

晩年の宮本武蔵と細川忠利

平成30年2月7日

横浜歴史研究会 大瀬克博

宮本武蔵が生涯で一度だけ仕えた主が肥後細川藩初代藩主の細川忠利である。武蔵は忠利の知遇を得て熊本で晩年を過ごし生を終える。そして人生のすべてを結晶させた歴史に残る名著五輪書を完成させた。

武蔵の生涯

宮本武蔵は小説、映画、テレビドラマそして漫画で有名な剣豪である。しかし、その実像はよく分かっておらず、我々が知っている武蔵の殆んどは吉川英治の創作によるものである。吉川英治自身が「史実として確実に言えることは微々たるもので、明確にその存在や言行を知り得るのは彼が熊本に落ち着いてからの晩年である。」と『随筆宮本武蔵』に述べている。小説がベストセラーとなり、史実と間違えられ定着するのを恐れた吉川が随筆を書いたとされる。吉川は伝記や逸話を取り入れ、調査に足を運び創作したのである。恋人・お通や竹馬の友・本位田又八は創作であり、また沢庵和尚との交流も事実ではない。ただ、沢庵は武蔵と同時代を生きた実在する有名な禅僧である。

武蔵の生涯である。

天正12年、1584年に播磨に生まれ、岡山美作の新免無二斎の養子となる。

13歳 兵法者の有馬喜兵衛と初の勝負をして勝利した。

17歳 関ヶ原合戦に加わる。

21歳 京都吉岡一門との戦いに勝利し名を上げる。

29歳 佐々木小次郎と巖流島で立ち合い、これを破る。

32歳 大阪夏の陣に徳川方として加わる。

54歳 小倉小笠原藩の家老となった養子伊織と島原の乱に参戦する。

57歳 細川藩に招かれ客分として定住し、1645年62歳で生を終える。

生涯にわたり60余度の勝負をして負けたことはないと言われているが、武蔵がどのような生を送ったか定かたではない。その一生のほとんどを漂泊、遊歴で送ったことは間違いない。

細川忠利

細川忠利は忠興とガラシャの三男で肥後熊本藩の初代藩主である。長男忠隆は細川家を勘当廃嫡となり、次男興秋は他家へ養子となっていたので忠利が細川家三代目を継ぐ。忠利は慶長5年15歳の時に人質として江戸に住み、その年の会津討伐で秀忠の供として出陣した。その働きが家康、秀忠の評価を得た。そして24歳で秀忠の養女千代姫と結婚する。千代姫は小笠原秀政の次女で家康の曾孫である。

細川三代目となった忠利は豊前小倉藩主となるが加藤家改易により肥後熊本藩へ移封された。移封の理由は、豊臣家に忠誠心を持っていた目障りな加藤家を改易したかったこと、そして油断ならない島津家の抑えとして信頼厚い細川忠利を持ってきた、と考えられる。忠利は熊本城への入城に際し加藤清正の位牌を先頭に行列を組み、城門の前で草履を脱ぎ、真っ先に清正の墓に詣でるなど、清正を慕う領民感情に最大の配慮を払った。領民の清正人気は絶大であった。

寛永14年10月に起きた島原の乱は幕府九州連合軍が鎮圧に苦戦、翌年1月には総司令官板倉重昌が戦死する。そして忠利が江戸から参陣し、その陣頭指揮で細川軍は原城を落し天草四郎を討ち取る。

忠利は武芸に熱心で柳生宗矩に師事し柳生新陰流の秘伝兵法家伝書を与えられた大名剣士である。武蔵は忠利の招きを受けて熊本に移住する。忠利は「武蔵の兵法に値段をつけては悪かろう」と言って武蔵を客分扱いとした。高禄を与えてもそれ以上の重臣はおり、武蔵は序列としてその下には置けないとの考えから家臣序列の外にしたのである。待遇は300石、居宅は熊本城本丸近くの千葉城屋敷とした。忠利は人の心の微妙さが分かる人であった。吉川英治は忠利を元和寛永期諸大名の中でもっとも出色の人物であったと評価している。

忠利は病を得て54歳で急逝する。生来病弱であった。この時に19人が後を追って殉死をする。殉死者には重臣の他に微禄の者も含まれていた。18人は許しを得ての殉死であったが、他に割腹自刃した1人の老臣がいた。阿部弥一右衛門である。許しなく殉死したことで遺族への処分は厳しく、その1年後に藩への反意を示し屋敷に立て籠った阿部一族は討手を向けられ全滅する。討手側にも7名の死者が出る大事件で、その顛末は森鷗外の小説「阿部一族」に詳しい。

吉川の小説に出てくる沢庵和尚と忠利は親交があり、忠利死去の際に子の細川光尚に長文の惜別書簡を送っている。沢庵は忠利を「胸襟雪月 心裡清泉 好事風流」と評している。

芸術家として武蔵

武蔵と忠利は単なる主従関係ではなく、もっと深く心の通い合った心契の知己であった。忠利の急逝に失意落胆した武蔵は門を閉じて書画、細工などに打ち込んだ。武蔵は多芸多能であり、絵画、書、彫刻、武具など余技とは思えない素晴らしい作品を残している。作品は肥後熊本での晩年に集中していて特に絵画が有名である。

武蔵の絵師としての評価が江戸時代後期に発表された書物「画道金剛杵・古今画人品評」にある。これは文人画の絵師・小林竹洞によるもので、吉川英治は江戸時代の画史評伝の中でさすがと思われる数少ない評論であると述べている。

それによるとランク「上中品」に雪舟や狩野探幽、「上下品」に俵屋宗達と尾形光琳、「中中品」に海北友松、「中下品」に宮本武蔵、「下上品」に円山応挙と伊藤若冲などの絵師が並んでいる。武蔵は画人としても一流の評価を受けた一例である。評者中林竹洞は絵画の精神性を重要視したとされる。

宮本武蔵は海北友松に師事したとの説があるが定かではない。武士の気迫が込められた画風は海北友松に連なるとも言われる。ただ、五輪書では「兵法の利にまかせて、諸芸・諸能の道となせば万事において我に師なし」、とすべてにおいて師匠はいないと書いている。有名な「枯木鳴鶉図」は枯れた木の上にモズが止まって一声鳴き声をあげている図で、人間の孤独を鳥に託し象徴的に表現して武蔵の代表的な作品とされる。この絵は蘭学者渡辺崋山が江戸の骨董屋で見つけ、その余りの素晴らしにあわてて借金して買い求めたと言われる。また、この枯木鳴鶉図に芦葉達磨図、芦雁図を加えた三点は大正4年の東京大学卒業式への大正天皇行幸時に展示され天覧の栄に浴して話題となった。芦雁図は細川忠利の求めで画いたとされる屏風絵の大作である。さらに余技の細工も巧みで雲巖禅寺に残る不動明王立像、また武蔵鏢と呼ばれる鏢など優れた作品がある。

五輪書

やがて武蔵は岩戸山雲巖禅寺の靈巖堂に籠り座禅三昧の日々を送る。そして忠利の求めで献上した「兵法三十五箇条」を元に五輪書の著作に取組んだ。五輪は密教五大思想の地、水、火、風、空であり、五輪書はこの五巻よりなる。武蔵は細川家菩提寺である臨濟宗泰勝寺の住職春山和尚と心友であり道友であった。

・ 「地の巻」は剣法の基本的な考え方を大工に例えて説明する。大工の棟梁を例えに武門の大將のあるべき姿を説いている。武蔵は全てに大切なのは拍子(リズム)と強調する。

・ 「水の巻」は二天一流の剣法、心のもち方、姿勢、目つきにつて解説する。心のもち方では平常心の重要性、目つきでは物事の本質を深く見きわめることを第一とし表面的な動きは二の次にすべしと説いている。

「火の巻」は実戦の知恵であり、敵と戦う時には相手側の立場に立って、その心情と行動を推測することが大事という。

「風の巻」は他流批判で長太刀と小太刀のことを論じ、武器に拘るべきでないと述べる。そして戦いは目で見るとより心で見ると説いている。

「空の巻」では武蔵が到達した精神的な境地を述べる。武士たる者は、「心(シン)」と「意」の二つの心を見がき、「観」と「見」の二つの眼を開くことを怠らない、そうすればくもりが消えて迷いの雲も晴れ渡る、それが空であると述べている。

五輪書は英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語などに翻訳され世界の多くの人に読まれている。駐日アメリカ大使を務めたエドウィン・ライシャワーは五輪書を「日本人魂の魅力」を伝える書であると激賞した。欧米では経営書としても読まれていて、ハーバードビジネススクールでは経営教則本として採用された。

武蔵の最期

五輪書は執筆に入って二年近くたった正保二年、1645年、5月12日に完成し二十一箇条の「独行道」と共に高弟の寺尾孫之丞に手渡し5月19日に62歳の生涯を閉じた。

宮本武蔵の葬儀は藩葬とされ、剣士としては未曾有のものであった。本人の遺言により死骸には甲冑を着せ、太刀を佩かせ、六具を纏って武装した身なりで入棺をした。

小倉藩筆頭家老であった養子伊織への書状に「君侯二代に仕え、その恩寵を蒙ることすこぶる深く、願わくば死せん後も太守が江戸参勤の節には御行列を地下にて拝し、御武運を護らんとする。それ故にわが遺骸は街道の往還に向かつて葬るべし」と書いている。

死後においても奉公をという程に細川家の恩寵に武蔵は感銘を受けていた。

墓所は参勤交代の豊後街道の傍にあり、その前では必ず馬から下りて通ったといわれ領民の武蔵への畏敬の念は擬神的でさえあった。現在の武蔵塚である。

武蔵は肉親や知己に恵まれず生涯逆境の孤高の人であった。その逆境が剣と心を研いで二天一流の境地を大成させた。そして晩年になり武蔵を認める英君に巡り合ったことが、長年の志を結晶させた五輪書という至宝を後世に残すことに繋がった。

主な参考文献

- ・「随筆 宮本武蔵」 吉川英治 講談社文庫
- ・「宮本武蔵 最強伝説の真実」 井沢元彦 小学館文庫
- ・「それからの武蔵」 小山勝清 集英社文庫
- ・「五輪書」 宮本武蔵 神子侃訳 徳間書店
- ・「江戸幕府の宮廷政治・熊本藩細川忠興と忠利の往復書簡」 山本博文 講談社文庫
- ・「くまもと 美と匠の400年」 吉丸良治 熊本日々新聞社
- ・「細川家の700年 永青文庫の至宝」 細川護熙他 新潮社
- ・「宮本武蔵語録」 斉藤孝 キノブックス
- ・「山桜記」 葉室麟 文春文庫